書評

越前藩幕末維新公用日記

三上一夫

幕末の越前藩家老本多修理〔文化十二年（一八一五）～明治三九年（一九〇六）〕が幕末維新期の激動する政治社会情勢を越前藩の立場より丹念に記録した『越前藩幕末維新公用日記』が、このほど県郷土誌懇談会から刊行された。元福井市立郷土歴史博物館長谷口初意氏〔福井市立足羽一〕が足かけ十年がかりで解読・校訂したものである。

原本は、修理が元治元年（一八六四）八月第一次長州征伐の藩総奉行として出陣するところから、明治二年（一八六九）二月藩政改革により解職されるまで、四年七ケ月にわたって筆録した日記で、かれの子孫本多操氏（神戸市在住）宅より発見されたものである。薄葉横綴小帖五冊三四二枚にわたり、行草二体を交えて細密に記録されている。実は去る三十八年本多家の子孫、皆川深氏〔星金属株式会社代表取締役・大阪市西区立売堀北通三〕が、貴重な史料的価値に着目してその公刊を発願し、当時福井市立郷土歴史博物館長であった谷口氏に解読・校訂を依頼したことによる。

修理は幕末維新期にあって、松平春嶽の重臣の第一人者として当時の内憂外患の緊迫した情勢のなかで、京都・江戸・福井を舞台にして公武合体派の政治路線の貫徹に極めて真剣な働きをしただけに、日本史全体のなかでの越前藩の動向を理解するうえで、甚だ重要な史料と思考される。また、このことは単なる藩政史料にとどまらず、ひろく国政史料としての十分な貫録を示すものといえよう。次に、各冊の内容の注目すべきところを若干指摘したい。

第一冊・第二冊（元治元年八月二十八日～同二年三月七日）元治元年八月藩主茂昭が朝命によって征長軍副総督として第一次長州征伐の途につくところに筆をおこし、九州の小倉に出陣して翌二年三月帰福するまでの終始である。修理は出陣総奉行として御供したため、この両冊には「征長御供日記」の表題がある。越前藩による関連史料として『征長出陣記』・『長防征伐略記』・『長州征伐小倉陣中日記』・『続再夢紀事』などが挙げられるが、この日記は総奉行の手記であるだけに、藩の政治的動向というよりは、むしろ陣中の具体的な諸事情をうかがうえで珍重すべきものである。また、尾張藩（総督）・肥後藩などからの諸情報も詳しく記録されており、さらに西郷吉之助（隆盛）・吉井幸助来訪の記述もあるので、薩摩藩側の調停工作の内容も知られて甚だ興味深い。

第三冊（慶応元年十月朔日～同三年六月十四日）第一次長州征伐後から大政奉還前

に至るまでの時期で、とくに春嶽の多難な動静を中心としたものである。第二次長州征伐の実施と失敗、将軍家茂の急死、慶喜の将軍就任、薩長倒幕派勢力の急速な伸張という一連の事件で、いよいよ幕府が一路倒壊に向って大きく推転する政局の動きが克明に記述されている。

第二次長州征伐に対して、越前藩では真向から反対意見を表明したが、このさい薩摩藩も出兵を拒否し、慶応元年九月二十七日同藩の大久保利通がわざわざ来福して、事態収拾のための春嶽の上京を促した。そこで春嶽は、薩摩藩の積極的な申し出に共鳴して、早速十月一日福井を出発した。そして、今庄まで来たさい、在京の毛受鹿之介が急帰して京都の情勢を報告したところ、「申出候てもその甲斐なく、又外国の儀に付ては、兼て持論も申上置候事にて、今更申上候様もこれなく、左候へば罷出ても益なく、且嫌疑も相益儀に付（後略）」（二二四ページ）との情勢判断から、上京をとりやめ福井に引返したのである。日記は、この事情を述べたあとに、各方面の諸情報を詳さに収録しているが、これらから総合的に判断すると、反幕勢力を結集しようとする薩摩藩の動静に対して、春嶽は甚だ警戒的な態度をとったものとみられる。薩摩藩については、例えば文久三年の越前藩の挙藩上洛計画のさい、薩摩藩が同調を求められたのには応ぜずに、その後間もなく会津藩と結んで「八月十八日の政変」を強行したいきさつがあり、越前藩として従来の薩摩藩のとかく策謀的な仕打に対しては、極めて批判的にならざるを得なかったものとみてよい。従って、これらの記録を詳さに検考することにより、越前藩と薩摩藩との間の微妙な政治的駆引がうかがわれて誠に感銘深いものがある。

さらに、慶応二年六月から同年十月一日まで春嶽の滞京約三ケ月間の記録では、将軍家茂の急死という事態から、その後継問題がそ上にのぼるが、そのさいの偽らない種々の内情を伝えている。とくに、修理と青山小三郎とが七月二日と同二十五日の二回勝安房を訪れたことは、『海舟日記』も伝えるが、本書には勝の率直な意見が詳しく記載されていて興味深かい。また、伊藤友四郎や毛受鹿之介らが板倉閣老、二条関白らの要人に情報探索のため赴いた結果も収録されており、当時の朝幕間の緊迫した情勢を知るうえで貴重なものである。この事情は『続再夢紀事』でもうかがわれるが、本書の方が直接の生々しい記録であるだけに、史料的価値は一段と高いものと言わなければならない。

ついで翌三年春には、四侯会議が中心課題となる。その一応の経過は『続再夢紀事』が伝えるが、この日記は春嶽はじめ随行の修理・中根雪江・酒井十之丞・毛受鹿之介ら重臣の真剣な政治工作が丹念に記録してある点で大いに注目に値する。

第四冊（慶応三年六月十五日〜同四年正月九日）前冊に引続いて大政奉還、王政復古から鳥羽伏見の戦の激発に至る幕府倒壊の大変革期に当るが、春嶽を先頭に押し立てる越前藩が、倒幕派と公議派の二大勢力の間に入って、その激突調停のための懸命な活動をすすめたことに視点がすえられる。もちろんその間の詳細な記述は『丁卯

日記』にみられるので、本書はその補完的な意義を持つものとして評価したい。

第五冊（慶応四年正月十日～明治二年二月六日）この時期は、修理にとっては最後の公職活動であった。幕府側が薩長倒幕派の策略で鳥羽伏見の戦に追いやられ、慶喜が朝敵の汚名を蒙ると、春嶽は新政府側の要職（議定）にありながら、親藩家門としての責任上、徳川家救済を中心とする事態の収拾に積極的に乗り出すことになる。このことは大局的にみて、国内分裂を避け国論を統一するためにも極めて重要な課題でもあった。修理は、二月主命で伊藤友四郎を副使として、旧幕府側の要人大久保一翁あての春嶽親書をたずさえて江戸に赴くが、大久保や勝安房との折衝の模様なども詳しく収録されている。

ところで本書と『戊辰日記』とを併せて検討した場合、このような越前藩の懸命な努力が結局のところ、朝廷側からもまた旧幕府側からも疑心暗鬼の不評を招くこととなり、その間の春嶽らの筆舌に尽くしがたい苦境のほどがひしひしとうかがわれ、薩長勢力を中心とする維新政権の成立過程において、越前藩にのしかかる厳しい諸情勢が一段とあざやかに浮き彫りにされる点で大いに着目すべきところである。

以上が内容の特筆すべき点の概要だが、とくに本書の史料的意義は、これに関連した越前藩士による手記『続再夢紀事』（村田氏寿）『丁卯日記』（中根雪江）『戊辰日記』（同）『征長出陣記』などの諸史料の足らないところを補完したり、さらに既刊のその他幕末維新史料には容易に認め難い政局の裏面史的な側面が探索できるうえで、極めて貴重なものと思考される。

解題は、歴史学者大久保利謙氏（前立教大学教授）によるもので、まず「幕末の越前藩」と題して、越前藩が雄藩として活躍した動向を明快に記載し、さらに「筆者本多修理と関連史料」に触れ、ついで各冊についての詳しい論述を行なって史料的価値を明らかにしたことは、本書をしてますます精彩を放たしめるものである。

谷口氏が解読・校訂後の感想として、「つぶさに、あの幕末維新当時の息づまるような胎動をしみじみ肌で感じた」（「あとがき」）と述懐しているが、本書を精読すれば誰しも谷口氏の精力的な優れた業績に対していたく敬服するとともに、当時のわが国の内憂外患の危機的な情勢のなかで、めざす新しい統一国家創出のため、春嶽を先頭に押し立てた越前藩が如何に苦悩し、真剣に努力したかを、この生々しい手記のなかから感得することができるだろう。

〔A5判、七〇一ページ、一部八千円、五百部限定版・福井県郷土誌懇談会刊〕